

三島村を活性化するためには どうすればいいか

～医療における現状・課題・解決策について～

研究科：医歯学総合研究科

学籍番号：4515700042

氏名：下敷領一平

1. はじめに

今回、「島嶼学概論 I」の講義の一環として、三島村硫黄島で一泊二日の研修を受講した。三島村での産業・医療・教育・文化などについて、理解を深めることを目的として行われた。三島村までは、鹿児島市内から週に 3 便、フェリーみしまが運航しており、竹島、硫黄島、黒島の順に停泊する。硫黄島までは、約 4 時間で到着する。硫黄島は、3 つの島の中心に位置し、面積 11.7km²、人口約 110 人の小さな島である。三島村を訪れるのは初めてで、硫黄島に着いて、茶褐色に染まった海の色を見たときは、驚きの感情とともに、深く感動もした。島の美しさを肌身で感じた瞬間であった。

2. 三島村硫黄島での医療の現状と課題

硫黄島で看護師として勤務する看護師の O さんから、忙しい中お時間を取って頂き、約 1 時間硫黄島の医療の現状について、お話を伺うことが出来た。

硫黄島へき地診療所には看護師が 1 名在駐しており、1 ヶ月に 2 回程度、鹿児島赤十字病院から医師が派遣されているとのことだった。三島村の他の診療所とも連携を取りながら、常に情報を共有し合っているとのことだった。鹿児島赤十字病院と他の診療所とをつなぐ、医療画像伝送システムが導入されている。患者の状態を、画像を通して医師が診断することが出来たり、TV 電話などの機能を利用して他の離島などと会議が出来たりしていた。

島内での救急医療については、日中日没までは鹿児島市内からのドクターヘリが、夜間は自衛隊鹿屋航空基地からヘリコプターが出動し、鹿児島市内の病院への搬送を行っている。しかし、天候が悪いとき、視界不良や強風の影響などで出動が困難な場合は、患者の搬送が出来ないこともある。緊急の際に患者の高次医療の救急処置が行えない可能性があることは、島で暮らす住民にとっても島で働く医療従事者にとっても大きな不安である。

また、硫黄島には救急車が 1 台もないのだ。高齢者の暮らす各世帯に「三島村遠隔見守りシステム」が配布されている。この情報を看護師の O さんをはじめ、役場の保健師の方や、ホームヘルパーの方などが常にチェックしている。緊急を要する情報が入った際には、看護師の O さんが自ら運転して、患者の自宅へ自動車に向かうこともあるという。もちろん、この自動車は救急車のような医療設備が整ったものではなく、ごく一般的な自動車であるため、何かあったときに救急処置を行えない、行うまでに時間がかかるという現状もある。

こうした島ならではの場面に対応できるような、医療従事者向けの研修会が鹿児島市などで月に 1 回程度行われており、O さんも参加しているとのことだった。実際に島で起こりうる事態を想定して、医師がいない状況での救急処置の方法などについて学んで、現場での実践に活かしているとのことだった。島内のみでは限界があるため、積極的に島外で

の研修会や勉強会に参加したり、島内に招待して講習会なども行ったりもしている。

3. 三島村硫黄島を活性化するための解決策

一番大きな問題として、医師がいないことが挙げられる。これに対する解決策として、現在は、月に数回だけの巡回診療という形で補っている。しかし、これでは救急医療には対応できず、TV 電話を通じての診療も直接的な対話ではないので患者の状態を完全に把握し、対処することができない。そのような課題を解決するためには、やはり、島内に医師が在駐することが一番の解決策である。

現在三島村では、「定住促進対策事業」として、移住した家族に対して子牛一頭をプレゼントしたり、毎月 8 万円以上の生活助成金を支給したり、新築一戸建て庭付きの村営住宅を格安な家賃で提供したりしている。このことで、人口減少を防ぎ、U・I ターン者の定住を促すことを目指している。

しかし、こうすることで三島村硫黄島は、本当に住みやすい町になるのだろうか。安全に、健康に暮らすという大前提を揺るがすような事態として、島に医者がいないことや救急車が 1 台もないことが挙げられる。これらの現状を無視して、移住者へお金を渡して移住で無理矢理人口を増やそうとするのは、単なるお金のばらまきと考えられてもおかしくないと私は考える。移住者のためにお金を与えて喜ばすのではなく、まずは、いま島で生きる人々、島で暮らす住民の声に耳を傾け、何が必要か、何をすべきなのか優先順位を考えて、そこに向けてお金を使うべきだと私は考える。住民が安心して暮らせる平和な町をつくることで、島の自然の美しさや島で生きることの楽しさがさらに輝き、そのときやっと島で暮らしたい、島に帰りたと思う若い人が現れることで、人口減少にも歯止めがかかってくるのではないだろうか。島での暮らしが素晴らしいものである、島の本当の美しさをアピールして、その土台を行政が連携して築き上げることが、三島村を活性化するための第一歩であると私は信じている。そのために、いま必要な救急車を用意するためにお金を使うことや、島へ呼ぶ医師のためにお金を払うことも、医療の充実の面ではひとつの解決策だと思う。

4. おわりに

硫黄島に滞在した時間はとても短かったが、島の美しさ、島で生きることの楽しさを肌で感じる事ができた。一人でも多くの人にこの感動を味わってもらいたい、島の良さを自分自身で感じ取ってもらいたい、その思いをたくさんの人と共有していきたいと思う。そうすることで、まず、島へ足を運んでもらい、それぞれが感じたことを、次の一步に活かしていけたら、もっともっと三島村は活性化するのではないかと思う。三島村が活性化して、本当の意味で住民に寄り添った、誰もが暮らしやすい島となることを切に望んでい

る。今回の硫黄島での経験は、私にとって確実に、離島医療に取り組む大きなエネルギー源となった。三島村で出会った皆様と過ごした素敵な時間に感謝。本当に、ありがとうございました。